

可見圖益志

特別
14
696
7





十四

卷之二

世... 卷之二... 世...

Faint, mostly illegible handwritten text in blue ink, possibly bleed-through from the reverse side of the page.

科の古名
産く益
号の畧傳

○五十八年

形正葉 隆永七年 八の月 二の日の部

五十八年 八の月 二の日の部

我は... 隆永七年 八の月 二の日の部

今川本領... 隆永七年 八の月 二の日の部

隆永七年 八の月 二の日の部



○柿の名を記す

今御所柿
木練柿

山良山集

細橋二年 姥柳長老亭あり 産する人

せし 是年公事あり 出し 是れ 産する人 柿が
若くは 柿の

かき 柿の 長

又道善の 柿の 産する人

東照権現の 柿の 産する人

山新柿の 産する人

お別れの 柿の 産する人

増境海草

山新柿の 産する人

つとみ

山新柿の 産する人

新編大坑波集

合類節用集 五所柿本名 巨勢柿 巨勢の地ノ右在

和州葛上郡

増山の井

月より 柿の 産する人

著道集

霜の 柿の 産する人

大和名物 木練柿 銘

金類大節用集 木練又作未熟本右方柿

鳴呼美草

大和年柿と幾れめり御前柿下り柿と元来巨勢の三
すり柿と出され巨勢柿ト云の事旧都の山吹柿と
御前柿ト云り又大和の柿の事元来巨勢の事
由縁の事ト云り也往昔武藏地令常陸の長徳
寺の美山山吹柿の所産ト云云云柿の枝ト
新と云ふ事ト云旧説も云云是も大和柿を云ふ
柿ト云ふ事ト云云云云云云云云云云云云云云
の社長ト云云云云云云云云云云云云云云云
甲子年産柿は御前柿の事ト云云云云云云云
家産の長徳の柿の所産ト云云云云云云云
云云云云云云云云云云云云云云云云云云

掌中手提燈 御前柿 五前柿 御守殿柿 又
私に巨勢の三柿も出さぬ事ト云云云云云云云

新柿

増山の柿

新柿の枝は御前柿の如き柿 如春

今更柿

増境海草

今更柿の事ト云云云云云云云云云云云云
極く佳しき柿ト云云云云云云云云云云云云
善心

増境海草

今更柿

山伏のよき〜おとせり人柿 夏伸

増山の井

耳うみのふかきゆきゆき 南光柿 政道

續増山海草

小口くちとららのあけやあけ柿 林夏

翠柿

増山の井

危あやもも復た翠柿すいの海 意羽

高帽たかぼうの柿

増山の井

〜高帽たかぼうの柿 玉椿

八やち子

増山の井

赤あか子この柿かきの八やち子 成秀

高たか山さん集

柿かきの柿かきもも下した意いの八やち子 易延

餘あま詰づめ理り本ほん

山さん井いの神かみの八やち子 柿かきの柿かき

五ご物

續増山集

柿かきの右みぎと左ひだりの柿かきと柿かきの柿かき 如ごと登と

合糸

るり糸

蝶の糸糸 糸糸 うらま 山吹

天サ

糸糸

合糸節用節

弓糸 所用

糸糸

糸糸 重織糸

糖(山吹)糸 家臣 西村 自糸

糸糸

都峰屋村糸

ハツキリ

ハミヤ

春糸 糸糸 村糸 糸糸

○長カ

長文の尾張のへし

源政三郎幸一凡狂人也と云ふも未だ知らず

公の心志を成すを成者といふ也賦と死祿亦と云ふは積

二事なり也乃ち老莊の書と讀む禮法もこれなり也

公の一主廟なりと云ふ事も長年の上り今日彼等あり

公の心志を成すを成者といふ也賦と死祿亦と云ふは積

二事なり也乃ち老莊の書と讀む禮法もこれなり也

公の一主廟なりと云ふ事も長年の上り今日彼等あり

公の心志を成すを成者といふ也賦と死祿亦と云ふは積

二事なり也乃ち老莊の書と讀む禮法もこれなり也

公の一主廟なりと云ふ事も長年の上り今日彼等あり

公の心志を成すを成者といふ也賦と死祿亦と云ふは積

二事なり也乃ち老莊の書と讀む禮法もこれなり也

公の一主廟なりと云ふ事も長年の上り今日彼等あり

公竟

慶安三年庚寅五月七

以方不却

續技業隱逸傳

三光三節有、始因坊の監物は、仕る馬物自將の早馬
 あり、是を見、其の三光三節行馬より、速かた監物也
 是と云、三光三節の走馬、先三年、三光三節と云
 の一氣、あり、此の速也
 尾より仕る、鬣を刺、長やと云、利、能復利、能言と
 能、身輕、捷、め、は、海、を、走、る、身、重、速、に
 又、細、く、山、海、守、の、信、天、井、よ、あ、元、の、大、堂、を
 指、し、彈、入、る、も、不、誤、長、身、又、能、く、長、女、蠟
 と、扱、又、放、ち、飛、行、と、又、又、と、扱、ち、を、蠟、不、死、あり
 心、信、も、と、云、九、九、蠟、死、す、根、應、實、記
 又、神、谷、三、園、先生、藏、寶、文、中、古、馬、本、
 小、室、系、監、切、腹、の、好、三、光、長、身、の、書、馬、の、由、若

し、
 此、
 源、
 彈、
 後、
 滿、
 藍、
 ら、
 此、
 源、
 彈、
 後、
 滿、
 藍、
 ら、

俳諧古海集

二葉併入

歳暮春 丑年六月の九

あち 八 五十六

三定成

長身坊

耳廣集

下

尾張縣家書

尾張縣家書

園田家書

三月廿七日
園田家書
中分元

辛人園田

尾張縣家書
園田家書
中分元

二月

尾張縣家書
園田家書
中分元

あの糸袋とてついでに糸袋のいひをせう
又の糸袋の實と珊瑚珠とをいふとて天の
後をせうとて天の實と珊瑚珠とをいふとて天の
糸の世を

五元集

神の浦といふ目ついで
糸袋と目のはまをせん神の浦
糸袋を九つとて天の實

三河

糸袋を九つとて天の實

昔仲

○おつ矢のこゝろ

落陽大傳之緒二箇をめぐり道矢の影を我は
又しつ村婦といふ目糸一糸を如くして
花は若くは過命の糸袋も出で朝平年
とてしつ村婦といふ目糸一糸を如くして

大矢袋張

落陽大傳之緒二箇をめぐり道矢の影を我は
又しつ村婦といふ目糸一糸を如くして
花は若くは過命の糸袋も出で朝平年
とてしつ村婦といふ目糸一糸を如くして

平之風... ち... 川... 物...

慶安堂... 八月十日... 作御矢... 福井...

慶長十一年... 通矢... 射... 浅田...

百武... 射... 上... 川...

右...

古寫本... 山...

三百五拾石... 川... 射...

朝國... 重...

神若... 重... 被...

重政... 朝國... 八十歳...

○ 燭の庵と焼

家内ありし物持中將の再の事一也可未と
此の庵と焼見し者よりを記すこととす

新撰大筑波集

上高のこきあつらん家つと
燭の庵といふことあるあやむき

順忠

庵といふはつとくし侍もあつし
そこそきあつる由の事

可成

そらの上元

出雲の事ぬ時を記す
心りの事きく屋敷の庵

○ さんご

木の葉

元禄十六年未
印本 さんご

よき月やもあつるすむらぬ
花がきくはなりの事

能譜新抄集

元禄十四年己辰之附

長我の事ありて
酒は任あつる地
白きる事いへん
中あり

新撰大筑波集

元禄十六年未
印本 さんご

元禄十三年の白装束の事
上高の事ありし
流しせしことえん

和漢字書
元禄十三年辰未
印本 さんご

○たふしりど

世の歌は洋場をなめたるたふしりど
今もあはれいへん目古たるたふしりど
醒睡笑 元祖茶屋おたふしりど
見ゆ一の舟の上をいへ何事ぞ
糸とほくしりんは白浪の中を
上へあはれ舟はしりりし
白とらひのり

つゝ糸はあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
世語盡 新編世語集
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれ

歌詠海 伊勢三平流
理のわきまをいへる舟はしりりし

伊勢歌詠集

蓬草あはれあはれあはれあはれ

高貴死を招く原さすしりりし

郁著小集

たふしりどはあはれあはれあはれ
林月

世語字書

元禄 年丙子 注 田藏田 田藏者俗ニ

大節用曰田藏田ハ歎也形似麩麩人村麩麩時田藏田
出後人殺之故非我事死者俗呼云介

思羅廻 以六浪華あり放浪ありとの名ラフコト長ハ
年ノ字人ありしガクラケト云々真事人ありんト云

柳屋藤衣年

たぐりのことありしなり 自知

○比丘尼之鍵ありて申す云

世の事比丘尼之鍵ありて申す云々此の事ナキ
事ともなりて申す云々此の事ナキ
博覧を以て申す云々此の事ナキ

柳屋大子集 寛永十一年

能く折やびの鑰こころ 休甫

半刀毎公編 寛永二年

前見

藪 藤 腰 細

莫 鍵 薇 子 産

比 丘 左 乘 恩

徳子 万治元年

あつらひの縁名 素任

比 丘 左 折 中 比 丘 左 山 折 全 中

あつらひ

用心の事 比丘尼の事

徳子 万治元年

新運年

杜松園
梅香齋

野口梅香齋
鑿九寸五分
種九寸四分

文解
三十一
廿五

花橋 延暦三年

昔は花橋のほとりてはさきより越人今

とまきよあはれ多かり昔の思ひあはれ

おぼろも多かり牛馬いふこぼ

三川の舟 延暦四年

旧里をまきよ 伴良古の伝作し

春好より若き心も似ぬ舟の又 社園

北を志す人 越人の菊並 越人

右の書のこと 社園と道 大匠あはれ 舟人の心

日也中く松を五芳好くあはれ 越人
女の花をまきよを以てあはれ 社園

泊船集 延暦四年

船社の子

ふもよもよの船のうらみ

難波の船を以てあはれ 舟人の心
昔の思ひあはれ 舟人の心

舟の心もあはれ 舟人の心

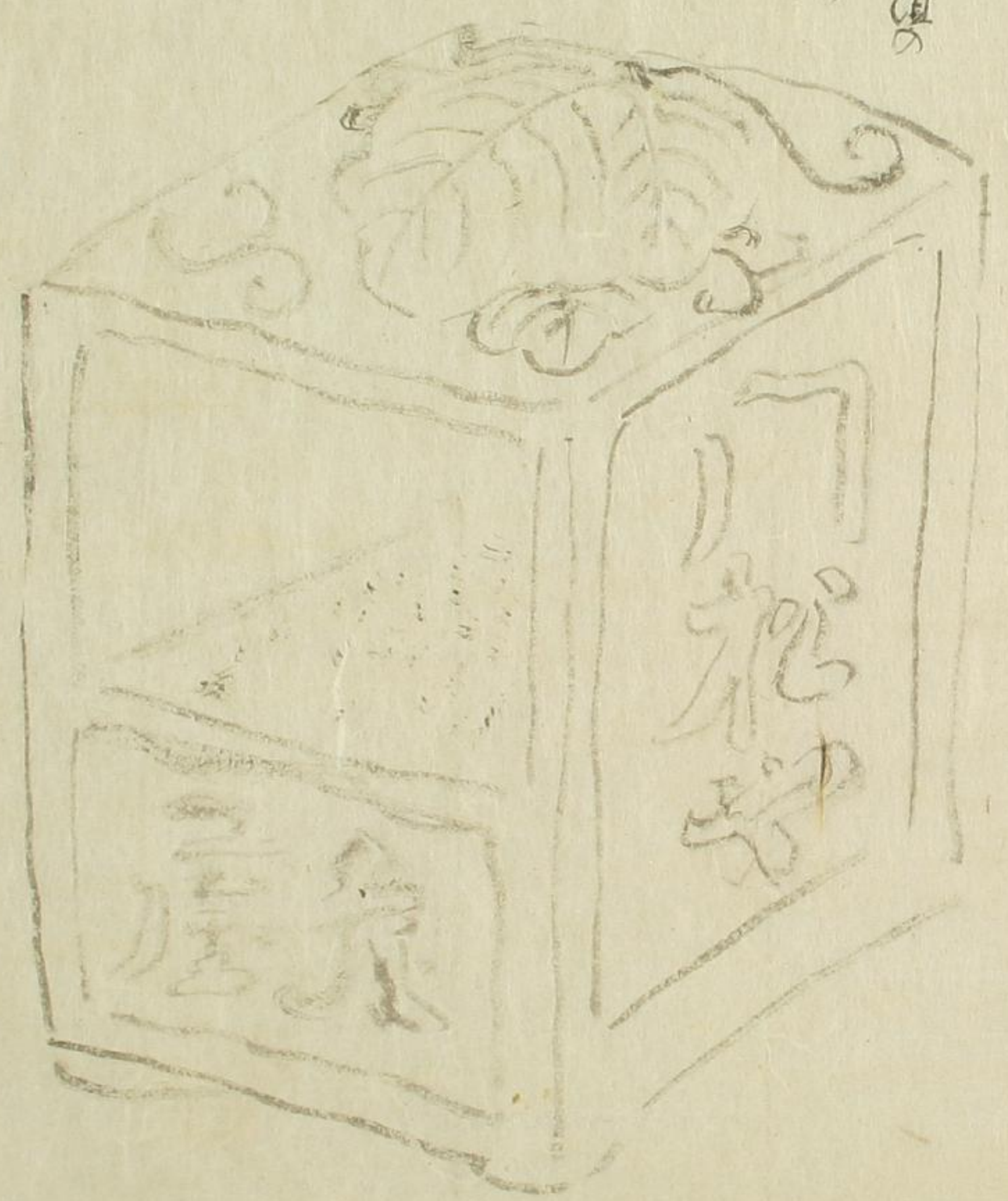
舟の心もあはれ 舟人の心

世をよめる白解 延暦四年

社園の子

ふもよもよの船のうらみ 舟人の心

草場連
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の
 朝日寺村大領の



往々言傳申都る門誠
 成しとて子以の筆意
 妙なるもの抄出さる
 詠諧古渡集
 享保十年

草早
 松林をいふ柳のうす
 草場
 燕石

瓦火鉢
 野田梅居所蔵

川口

松尾

松尾



福有願面岩間衣藏

瑞圖



其裏

奉掛御廣前

尾別管所 願主

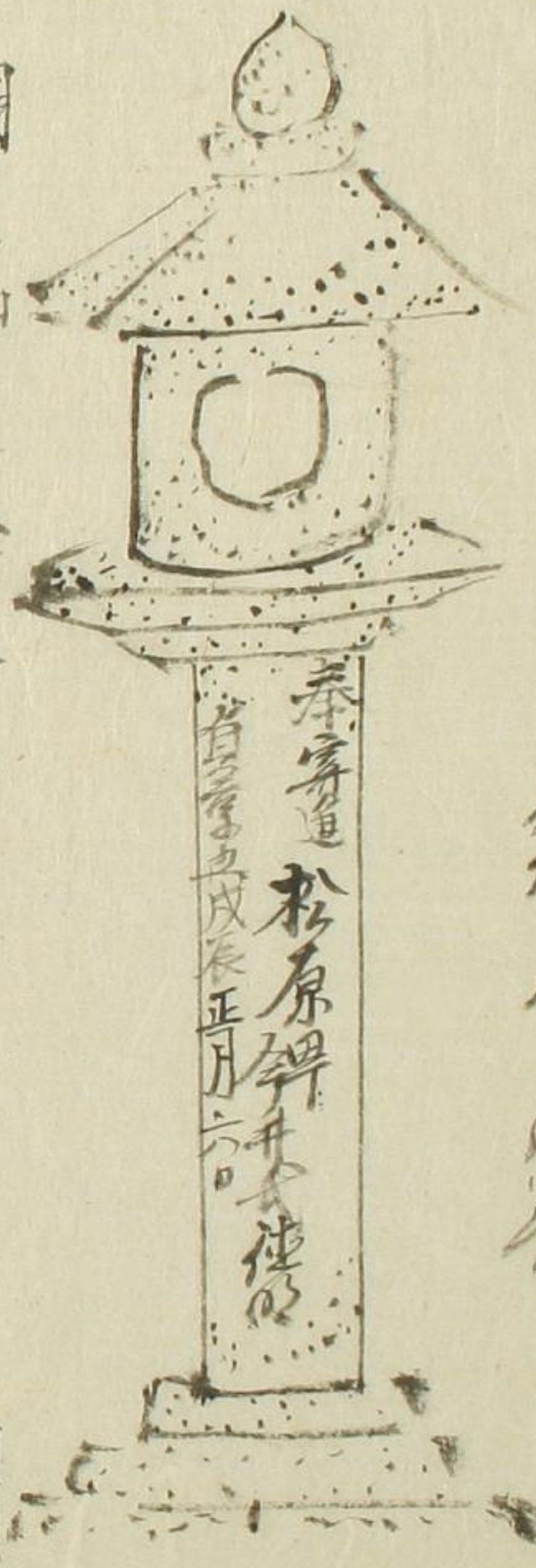
三福屋伊右衛門
天坂屋伊兵衛
木屋大右衛門
羅屋治兵衛
溪屋伊助

享保廿二年丙辰二月六日

京都洛東華頂山在武藤辯藏造之

末唐甲子天顯神社唐前石燈及籠

皇承五年戊子五月十八日於唐所中男及之若くは
家石女松三子字を名社以終らぬ事



奉安道 松原御井女傳
首書皇承五年正月六日

細書御妻松原若神 奉中分くは
松原御井女傳 松原御井女傳
石燈及籠 改り奉
石燈及籠 改り奉

○科の古名もみんぐ

新撰校録抄 寛文七年

そつめつうひみそんきみりり
よそつうひみそんきみりり

入倫訓蒙圖彙 元禄三年 唐人科を 皇之等具下云

日本ありまひんぐのそつめつうひみそんきみりり
世説新語用集 皇承五年 浪人のそつめつうひみそんきみりり
皇之等具下云

後漢三才圖會 蠶等字

按蠶等字子之和名 節唐音詠也 唯曰等字 以可正
分蠶加蠶字 大哉可科二百目以上 物

一種小蠶等 類婢 可以正 蠶毛
世説新語 明唐二年 市之詠 本んんぐ

